

版權所有

一讀
了解
唐詩選和歌意

五言絕句之部

東京 鐘鈴堂發行

1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4



Handwritten text in vertical columns, including characters like 杉, 松, 竹, 梅, and numerical values such as 三時, 四時, 五時, 六時, 七時, 八時, 九時, 十時, 十一時, 十二時.

定價金五錢



大抵 考 拾遺 (三十一卷)
 三十一卷 考 拾遺 (三十一卷)
 七十一卷 考 拾遺 (三十一卷)
 四十一卷 考 拾遺 (三十一卷)
 九十一卷 考 拾遺 (三十一卷)
 拾遺 考 拾遺 (三十一卷)

版權所有

一讀 了解
唐詩選和歌意

五言絕句之部

東京 鐘鈴堂發行

對嶽樓主人 島谷

序

斯書は唐詩の和解を編纂し初學者に面白く且つ平易に眞意のある所を知らしめんと欲し先づ稿を五言絶句より起し漸く己に脱稿す乃ち大家先生より批評を乞はんとせしもその全部大成の後に譲り一部の小冊子となし發行し世評の奈何を試みるとにせり且つ唐詩は國歌と同じく意味深遠に

二 して無學余の如き者の採擇編輯する
 の素より其の當を得るゝ難く他日全
 部完成の後時に或は訂正精選すると
 あるべし今や印刷部の間に際し早草
 のまゝ發刊の事ゝせりとしかいふ

明治廿七甲午四月上浣

編者しるす

唐詩選和歌意

題袁氏別業 たいすゑん し がべつぎように
 主人不相識 しゆ じん ち 二 あひ 二 しら
 莫謾愁沽酒 なかれまん にうれうる ことかふ ことさけを
 和解 わ かい
 偶坐為林泉 ぐう ざ ためなりりん せん の
 囊中自有錢 のう ちゆう 二 ねのづからあり せん

亭主は近づきれらねども
 れ庭をみるとてまいりたり
 酒のきづかひめさるなや
 用意の錢は巾着に
 偶然は何心なく坐るとにて知らぬ間柄なれど庭のけし
 き拜見だけが望なりと

二 道氏連城壁
 夜送趙縱
 楊炯
 由來天下傳
 明月滿前川
 送君還舊府
 三

和解

玉のようなる御徳とは
 兼てうわさがあるわいな
 君がれ里へ販るにぞ
 月も照りそふそみた川
 昔十五城と換る位の玉を持ちし趙氏と同姓故か徳望の
 高さ故にか川は輝く月は彼の夜光の玉の光るようだと
 云と

此地別燕丹
 昔時人已没
 壯士髮衝冠
 今人水猶寒
 易水送別
 駱賓王
 和解

かねて太子にたのまれて
 若武者髪さかたちと
 其人たちの死たあと
 今に水さへぞつとす

三 昔燕の太子丹が荆軻にたのみ秦の王を殺さんとすると
 き易迄送り荆軻は勇ましく髪もさかだちありしと云が
 實に懐古にたへず別れが恨みじやと云と

四

可憐べしあわれむ 驄馬そうば 使し 贈をくる 喬きやう 侍じ 御ぎよに
 漢庭かんてい 榮さかふ 巧こう 官かん 雲閣うんかく 薄邊うすへん 功こうを
 白首はくしゆ 爲ため 誰たれ 雄ゆうなる

和解

今の天子のみやづかへ
 軍でてがらはあけられず
 あわれや君は馬ふのり
 白髪ふりたていさぎよし
 贈はあたへる意漢實は唐代をさす邊境の大功の内閣の
 へつらひものより薄んせらるに考て馬にのり忠勤なも
 のじやとなり

五

道のはたなるあをやなぎ
 あれ春風がふくわいな
 わしが心ろのやるせなや
 思ふとのでに知せたや
 旅の夫の懐しき夫も如何に思ひ居るやしりたしと云と

子夜しや 春歌しゆんか 郭振くわくしん
 陌頭はくとう 楊柳やうりゆう 枝し 己すでに 被る 春風しゆんぷう 吹ふか
 妾心せうがこころ 正斷まさだん 絶せつす 君懷きみがをもひに 那得なんぞ 知しることを
 和解

南樓望 盧僎

六 去國三巴遠 登樓萬里春

傷心江上客 不_二是_レ故鄉人

和解

ふるさと遠くへたてきて

よかいに登る他の春

川の邊の客みても

在所の人ではありもせず

遠き三巴へ来ては知りびともなく旅はうきものじやと

云と

汾上驚秋

蘇颯

北風吹白雲 萬里渡河汾

心緒逢搖落 秋聲不可聞

和解

秋風雲を吹くころに

はるかに川をわたりのつゝ

心ろゝをれてみる落葉

さわつく聲の聞つらや

搖落は老の身をなげきまた不遇にて立身せぬとに用う

七

蜀道後期

張說

八客心爭日月

來往預期程

秋風不相待

先至洛陽城

和解

客の心ろに日をいそぎ

かゝる道迄つも身をく

なほ秋風はをくれじと

早や洛迄ふいてゆく

照鏡見白髮

張九齡

宿昔青雲志

蹉跎白髮年

誰知明鏡裏

形影自相憐

和解

昔は出世の氣もあれど

あゝさて白髮となを果た

九鏡の内は人知らで

影や形はわれあはれ

同洛陽李少府觀永樂公主入蕃

十邊地鶯花少年來未覺新

美人天上落龍塞始應春

和解

梅さゆさかぬるびす國

年がきたれど春めかす

玉のようなる君ゆかば

はんまの春のこ、ちせん

静夜思

李白

牀前看月光疑是地上霜

舉頭望山月低頭思故郷

和解

ねまの前にて月みれば

霜の色かと思はるゝ

十顔ふり上て月ながめ

又うつむいてものをもひ

怨情いんじやう

美人捲珠簾びじんまきしゆれん

深坐嘔蛾眉しんざゑむい

但見淚痕溼ただみろいこんうるをよ

不知心恨誰しらずこころうらむたれをか

和解

すたれまき上姫君は

また居なをりて顔とほめ

かわく涙のぬぐひあと

誰をうらむる心ぞや

秋浦歌しゆはか

白髮三千丈はくはうさんせんじやう

緣愁似個長よつてうれいごとくかくのながし

不知明鏡裏しらずめいきやうのうち

何處得秋霜いづれのどころかうるしゆそう

和解

ちひろもあらん我白髮わがしら

くろとる故にかくながし

か、みのうちをのぞひては

ほんにしもかと思はるゝ
李白罪あり秋浦に流されしときこの作

四十

獨坐敬亭山

衆鳥高飛盡 孤雲獨去間

相看兩不厭 只有敬亭山

和解

むらがるす、め飛びたへて
とぎれた雲もまたきへた
みれどもあいそつきさるわ
た、此山のありさまよ

見京兆章參軍量移東陽

湖水還歸海 流人却到吳

相逢問愁苦 淚盡日南玉

和解

五十
海にかへれる水ならで
君は流れて吳へゆかん
逢て名残をかたらへば
涙の玉の數つもる

臨高臺

王維

相送臨高臺

川原杳何極

日暮飛鳥還

行人去不息

和解

歌をうとをて見送れば

川も野原もはるかにて

日暮て鳥はかへれども

旅の宿へはまたつかせ

まだやどももどめずに居らるゝならん

班婕妤

怪來牀閣閉

朝下不相迎

總向春園裏

花間笑語聲

和解

なんぞ空うとざさしめ

君も御なりがなひことぞ

春めく姫に氣が移り

花をながめて笑ふ聲

漢の成帝の女官が寵のをとろへたを怨む詩

雑詩

八十

己見寒梅發
愁心視春草

復聞啼鳥聲

畏向玉階生

和解

早梅の花開きそめ

又鶯の聲ぞさく

人を思ふのわすれぐさ

庭のみぎはへ生やせん

心をよろこばす春草も君寵衰た身には却て愁をまして
蕃殖をれそる

鹿柴

空山不見人

但聞人語響

返景入深林

復照青苔上

和解

山よはるかど人みへで

こたまのひびく聲ぞする

竹のすきまの夕かけひ

またささくいるは苔むし

鹿多き山中のしもやしき柴はしかよけ

九十

竹里館ちりりくわん

獨坐幽篁裏どくざゆうわうら

彈琴復長嘯だんきんまたちやうせう

深林人不知しんりんひとしらず

明月來相照めいげつきたつてあひてらう

和解

つれなれに唯獨り

琴をつまくり歌うたひ

林の内は人らで

さしいるものは月ばかり

長信草ちやうしんそう

崔國輔さいこくほ

長信宮中草ちやうしんきゆうちゆうのくさ

年年愁處生ねんねんしゆうじようせい

時ときにかかして侵二珠履跡しゆりんのあとを

不レ使二玉階行ぎよくかいにゆか

御殿まわりの春のくさ

もゆる思をたねとして

ふと分けならせしけりつゝ

きざはしまでも登のぼられず

長信宮に居る班女寵は衰へ幸もなき故自然生ずる草を

題となせり

少年行しょうねんこう

遺却いまくして 珊瑚さんご 鞭むち

白馬はくば 驕たごつて 不行ずゆか

章臺しやうたい 折揚をる 柳りゅう

春日しゅんじつ 日路じつろ 傍情ほうじやう

和解

寶のむちをうちわき

馬もあがひて行ざれば

柳やなぎの枝をひきもひて

ひきやうをみせぬ遊女町

送おく 朱しゆ 大入たいいり 秦しん

孟浩然もうこうぜん

遊人ゆうじん 五陵ごりやう 去さる

寶劍ほうけん 直あたひ 千金せんきん

分わか 手つと 脱相贈だつしてあひをくる

平生へいせい 一片心いつぺんこころ

和解

貴様の京へ行につき

千兩いたした脇差わきさしを

別の名残に贈るべし

はなしてならぬ玉しいぞ

春曉しゆん きやう

春眠不覺曉しゆん びん 不 覺 曉

處々聞啼鳥しよ しよ 聞 啼 鳥

夜來風雨聲や 來 風 雨 聲

花落知多少はな 落 知 多 少

和解

夜曉も知ぬ入りすぎよあ け も 知 ぬ 入 り すぎ

ゆるべの嵐のつよさではゆる べ の 嵐 の つ よ さ で は

花もちるらん滅相にはな も ち る ら ん 滅 相 に

さけば方々鳥もかくさ け ば 方 々 鳥 も か く

洛陽 <small>らく やう</small>	洛陽 <small>らく やう</small>	訪才子 <small>とへば さい しを</small>	江嶺 <small>かう れい</small>	作流人 <small>なる りう じん</small>
聞説 <small>きく ならく</small>	梅花 <small>ばい けわ</small>	早 <small>はやしと</small>	何如 <small>なんぞ しかん</small>	此地 <small>ちの ち</small>
			二 此	春

和解

京で貴様をたづねるにきやう で 貴 様 を た づ ね る に

南へ流れたりときくみなみ へ 流 れ た り と き く

其地は梅がはやいけなその ち は 梅 が は や い け な

けれど都にやまさるまいけ れ ど 都 に や ま さ る ま い

袁氏南方江嶺へ役下りしを思ひやりし作えん 氏 南 方 江 嶺 へ 役 下 り し を 思 ひ や り し 作

洛陽道

儲光義

大道直如髮たい せうなほをして ごとし けの

春日佳氣多しゆん じつ か き た

五陵貴公子ご りやうの き こうし

雙々鳴玉珂そうくうとしてならす びやう ぎよく かを

和解

すぐなる道はとんと髪
春の氣色のうるわしさ
上京なごはよひ衆か
馬をならべて鈴の音
京の道にて貴公子の往來を吟せし也

長安道

鳴鞭過酒肆ならしてべんを よきり しゆ しを

袷服遊倡門げん ぶく あそぶ しやう もんに

百萬一時盡ひやくまん ひとし づく

含情無片言ふくんでじやうをなし へん げん

和解

馬を酒やへひきよせて

衣裳改め遊女行

千兩萬兩一ときよ

色につまつてをくらからせ

關山月

一雁過連營

繁霜覆古城

胡笳在何處

半夜起邊聲

和解

雁がすぎゆく陳のそら

霜をほさそら城の上

ゑびすの笳はいづくぞや

よわに催すいさゝ聲

夷國の山よて秋故郷を思ひし作

送郭司倉

王昌齡

映門淮水綠

留騎主人心

明月隨良椽

春潮夜々深

和解

門にさらめく江の當り

見送る亭主馬とゞめ

月に隨ひ君ゆかば

よなくれもわん此波を

答武陵田大守
 伏劍行千里
 微軀敢一言
 曾為大梁客
 不解負信陵恩
 和解

帶刀の身で遠き旅
 拙者一言申すべし
 したじ御國で御世話ゆへ
 まさかのときは思かへそ
 昔魏の首府大梁で公子信陵公が食客をなづけしとを借
 り來る

孟城劫 劫はなかくぼのこ
 裴 廼
 結廬古城下
 時登古城上
 古城非疇昔
 今人自來往
 和解

二十三
 古城の下に居をこめて
 ときく登る古城へ
 昔の古城ならぬゆへ
 今の人のみ行來する
 昔より今今より後と世の變遷を思ふ

鹿柴ろくさい

日夕じつせき見寒山みるかんざん

便爲すなはちなる獨往客どくわうかくと

不知しらず松林事しょうりんのこと

但有ただあり磨麈くんとく跡あと

和歌

日ぐれの山をながめつゝ

うとくゆく獨り客

思ひもよらぬ松林

鹿の足跡あらんとわ

寒山ふゆがれに獨りしもやしきふゆがれにありて閑静かんじやうのたのしみを吟す

復愁ふくしゆう またもうれふ

杜甫とふほ

萬國ばんこく尙戎馬なほじやうば

故園こゑん 今若何いまわかん

昔歸むかしかへりし相識しよしき少すくな

蚤己はやすでに戰場せんじやう多おほし

和解

天下てんか乱れてさわがしゝ

故郷こきやうはなんとあらんずる

まゝと捐死けんじ多くあり

もはや戰場せんじやう多おほからん

絶句

八句の律と云詩あり二つにたちしなり

江碧鳥逾白

山青花欲燃

今春看又過

何日是歸年

和解

水の緑に白きささぎ

山の青き赤躑躅

此春もついすぎにけり

いつか故郷へかへる日ぞ

長干行

崔顥

君家住何處

妾住在橫塘

停船暫借問

或恐是同鄉

和解

れまへの御宿はいづくぞへ

わらは塘のあちらがた

舟さしよせて問たらば

同ト在所でありもせん

男商女商打ち雜り交易する舟つきばにて交際をもとめ

しとら作

詠史

高適

尙有綈袍贈

應憐范叔寒

不知天下士

猶作布衣看

和解

ぬのこ一枚ぬぎすて
こゝゆる人をあわれみて
これ名將といざしらず
みそれて乞食と思ひけり
史にある范叔の事をひき自分の不仕合を云ひしなり

田家春望

出門何所見
可歎無知己

春色滿平蕪
高陽一酒徒

和解

門を出てもなにかみん
春の氣色は草よみち
さてさてつれもなきまゝに
たゞ獨りのむ酒れやじ
己の用ひられぬを憤り酒など呑んで居る故に世人は高
陽の酒呑み連位に思ふ

行軍九日思長安故園ころぐん きうじつ せもふちやうあんのこと せんを
 強欲登高去しいてほつするものほりてたかきにとらんご
 遙憐故園菊はるかにははれむよ せんのかく
 無なし人送酒來ひとの せくり さけを きたる
 應傍戰場開まさにならば せふて せん じやうにひらくなる
 和 解

山へゆさんにゆくくも
 酒をもちたる人もなし
 あわれ故郷の菊なごは
 軍場かけて咲やらん
 重陽の節の高さに登り不祥をさく軍にありてうつさん
 するも酒なく故郷を憐むばかり

渭水東流去ゑいすい とうりゅう ざる
 見渭水思秦川みて ゑいすい せもふ しん せんを
 何時到雍州いつれのとまかいたらん とうしゅう じやうしゅう
 憑添兩行淚よつて そへて りやう こうのなんだを
 寄向故園流よせて むかつてこ せんにかがさん
 和 解

水は東へ流れゆく
 我故郷へいたる可せ
 せめてなみたのつゆなりと
 流るゝ水にそへやらん

避賢初罷相さげけんを はじめてやめしやうを

樂聖且銜盃たのしみ せいを かつ 銜ふくむ 盃はいを

為問門前客ためにしとふもんぜんのかく

今朝幾箇來こんてふいくばくかきたる

濁るがいやで官をひき

すんた心で酒のまん

御出入の客いか程ぞ

さためてたんどはきたるまい

ぎの太祖酒を禁せし當時民濁酒を賢人清酒を聖人と唱へしとあり内閣をひくと訪ふものなさはさても濁世じやと云と

奉送五叔入京兼寄綦毋三たてまつり をくりと しくがいる にかれてよす きほ さんに

陰雲帶殘日いんうん をが ざん じつを

悵別此何時いたむ わかれをこれ いづれの ときぞ

欲望黃山道ほつしのぞまん とくわう さんの みちを

無由見所思なし よし みるに しょ しを

和解

黑雲夕日さす當り

送り出よとはなんの日ぞ

きさまの通る山の道

見と見別ぬ物の思ひ

左掖梨花 丘爲

冷艶全欺雪 餘香乍入衣

春風且莫定 吹向玉階飛

和解

奇麗なことはとんと雪

香はそでにひかざる

春風ねから定まらぬ

ふけば散り來きざはしへ

左の小門の梨花にかこつけ側使を望む作

九日倍元魯山登北城留別 蕭穎士
綿連漑川迥 香渺鴉路深
彭澤興不淺 臨風動歸心
和解説

つんづ流るゝ川遠く

ほのかま見へるみちすこし

きさまは心ろ面白く

風にふかれていぬ心

ろざんの赴任〇はうたくいとるゑんめいの令となりし
地而してゑんめいは故郷を思ひ歸りし故に其事をひき
用

平蕃曲

劉長卿

渺々戍烟孤

茫茫塞草枯

隴頭那用閉

萬里不防胡

和解

はるかたのろひもまれになり

ひろい戎の草もかれ

山のせき所もあけはな

遠くゑびすもふせがない

唐代凱歌の曲にて兵營のろひも孤となりしを云

其二

絶漠大軍還 平沙獨戍間

空留一片石 萬古在燕山

和解

すなはらよこにかへりきて

つはものどもよひまになり

手柄は石にほりつけて

末迄のこす山の上

燕趙悲歌士 相逢俠者 錢起
 相逢俠者 相逢劇孟家
 寸心言不盡 前路日將斜
和 解

余所の國なる歌男
 逢たは若い武者の家
 心のたけをいわぬまに
 かたむきやそい夕ひかな
 げきもうは漢代有名の俠者せん方にたとへて互に世を
 ためたくも老を如何せん

貴 江行無題

咫尺愁風雨 匡廬不可登
 咫尺愁風雨 匡廬不可登
 疑雲霧窟 猶有六朝僧
和 解

一寸先は雨と風
 廬山も今日は登られず
 大方雲霧あるあたり
 未だ昔の僧やいん
 六朝は吳、晋、宋、齊、梁、陳、

秋夜寄丘二十二員外

韋應物

懷君屬秋夜

散步

詠涼天

山空松子落

幽人

應未眠

和解

御前を思て秋の霄

あるさうたゑは空すゞし

山松ふるく落るころ

貴様はよもやまたねまひ

遠聽江上笛送陸侍御

還愁獨宿夜更向郡齊聞

和解

江子吹く笛をきしながら

君に別るし酒をのむ

なをあんじらるし獨の夜

一十五 さとしい牀で又聞ん

聞きく雁かりを

故園こゑん 眇べうと何處いづれのところぞ

歸思きし 方まさ悠哉ゆうなるかな

淮南わいなん 秋雨しゅうの夜よ

高齊こうさい 聞雁きく 來かひのきたるを

和解

古里はるか いづくぞや

歸る思ぞはてしなき

江の南の秋のよい

しづかな家で雁をさく

答たふ李り 澣かん

鷗

林中りんちゆう 觀み 易いきを 罷やんで

溪上けいじやう 對たいしてをうに 鷗かんなり 間

楚俗そぞく 饒詞をほし 客かく

何人なんびと 最もつとも 往わう 還くわんせん

和解

林の中で書をよんで

溪の當りでかもめみる

御里は風雅多きとよ

いかなる人が御つれぞや

婕妤好怨

皇甫冉

花枝出建章

鳳管發昭陽

借問承恩者

雙蛾幾許長

和解

花は御殿の上のみ

笛は御殿の内になる

御氣よ入たは誰人で

眉の長さはいかばかり

寵姫趙飛燕の盛景を云

殷勤竹林寺	更得幾回過
歳月人間促	烟霞此地多
題竹林寺	朱放

和解

年もよはいもささみわて

こゝは景色多きとこ

よふみてれかん此寺を

もう幾度もこゝすぎん

返へん 照せう 入い 閱り 巷かう

秋 日 歌 津
憂うれ 來ひ 誰たれ 共とも 語にかたらん

古こ 道どう 少ま 人な 行じん

秋 風 動 禾 黍

和解

夕日ゆうひ さし入る家當り

憂うれ さをかたらん友もなく

はたけのこみち人たへて

唐黍とうきび の葉の風さわぐ

月つき 黑くろく 雁かり 飛と 高たかし 單せん 于う 遠と 遁とん 逃とうす
和 張わす 僕ちやうぼく 射しやがさい 塞かのきよくに 下曲か 盧ろ 綸りん

和解

月のくらひに雁の聲

戎の王はよけてゆく

馬を飛して逐おひ行けば

弓や刀にゆきつもる

別廬秦卿

司空曙

知有前期在

難分此夜中

無將故人酒

不及石尤風

和解

亦逢ふとはをもへども

今霄はきつふ名残を

君を留むるこのさけは

舟出ぬ風と思はしやれ

幽州

李益

征戍在桑乾

年年蓟水寒

殷勤驛西路

此去長安

和解

軍に他國へまかりこし

毎年居は江の邊り

ねんころにみる宿の西

是から都へゆかる」と

三閭廟 さんりやびやう

戴叔倫 さいしゆくりん

沅湘流不盡 屈子怨何深 げんしやうながれてすつききくつしうらみなんぞふかき

日暮秋風起 蕭々楓樹林 いちほしゆうふうおこるしやうくふうじゆりん

和解

湘水流て盡せねば

恨みや深き昔より

日も暮れかゝり風吹は

秋の林の淋しさは

三閭大夫屈原諫死の川故に怨魂のあるように見へる

思君恩 おもふくんおん

令狐楚 れいこそ

小苑鶯歌 長門蝶舞多 せうえんあうかやんでちやうもんてふおほし

眼看春又去 翠輦不曾過 まなこにみるはるまたさることをすいれんすなかつてよまら

和解

苑には歌の聲もやみ

御殿に舞の聲多し

春の過るを知るとても

君のをなりはねがひなひ

登柳州峽山

柳宗元

荒山秋日午

獨上意悠悠

如何望鄉處

西北是融州

和解

此荒山の日さかりに

獨り登りて物思ひ

どこらが故郷當りぞや

西北見ればよそのくに

秋風引

劉禹錫

何處秋風至

蕭々送雁群

朝來入庭樹

孤客最先聞

和解

どこから秋風ふくことぞ

淋く送る雁の聲

今朝は樹木にそよぐこゑ

旅の人には耳にたり

鞏路感懷

呂温

馬嘶白日暮

劍鳴秋氣來

我心渺無際

河上空徘徊

和解

馬も鳴つゝ日も暮る

軍の聲に秋かなし

わしが心はかたつかず

河はた唯とちとち

古別離

孟郊

欲して別と牽郎衣

郎今到何處

不恨歸來遲

莫向臨邛去

和解

まあ暫くと袖をとめ

御前はどこへ行かじやんす

御歸ををそいはかまわんが

遊女御出は止めされよ

尋隠者不遇

賈嶋

松下問童子

言師採藥去

只在此山中

雲深不知處

和解

子供をよんで留守問へば

亭主は薬ほりにじやと

此山うちでをわすらん

雲で知ぬ行どころ

宮中題

文宗皇帝

輦路生秋草 上林花滿枝

憑高何限意 無復待臣知

和解

幸の道は草たらけ

御苑の花は盛にて

樓に登ても思ひ

そばの臣下も氣を付せ

勸酒すゝむさけを

干武陵かんぶりやう

勸君すゝむるきみに金屈きんくつ卮し

滿酌まんしやく不須すなはちひ辭じする

花發はなひらく多風おほしふう雨う

人生じんせい足別たりべつ離り

和解

君きみあすゝむるさかづきを

遠慮えんりょめさるな十分に

花はなひらくとき嵐あらしをほし

けふのであひも幸さいよ

秋日湖上

薛瑩せつえい

落日らくじつ五湖ごこ遊あそぶ烟波えんば處々しよしよ愁うれう

浮沈うきしん千古まのこ事こと誰與たれとともにか問東流とんとうりゅう

和解

日ひくれに湖うみへふね遊あそひ

處々あちこちに起立おきたち煙けむりりなし

人ひとの往古わうこの浮沈うきしんみ

流ながるゝ水みづにこと問とはん

題 慈 恩 塔

荆 叔

漢 國 山 河 在 秦 陵 草 樹 深

暮 雲 千 里 色 無 處 不 傷 心

和 解

山 河 の こ る 漢 の 國

草 木 は 深 き 秦 の 國

日 くれ の 雲 は は る く と

ど こ な が め て も 悲 き ぞ

伊 州 歌

無 名 氏

聞 道 黃 花 戍 頻 年 不 解 兵

可 憐 閨 裏 月 偏 照 漢 家 營

和 解

聞 ば 花 咲 陳 小 屋 に

年 年 軍 止 め ぞ と

あ わ れ や ね や へ さ す 月 か

夫 の 陳 も て ら す ら ん

出 張 中 の 夫 を 思 ひ 作 り し 詩 な り

其二

打起きして黃鶯あう兒こを

莫なけれ教しむる枝し上じょうに啼な

啼なく時とき驚おどろか妾せうが夢ゆめを

不ず得え到いたるを遼りやう西せい

和解

寢いねたる鶯打起こ

梅の枝間になかすなよ

鳴けはわらは驚かん

戎の夢ゆめを見そこなふ

哥舒歌

西部人

北ほく斗と七しち星せい高たかし

哥か舒じよ夜よる帶をよ刀かたな

至いたる今いまに窺うかが牧ほくする馬うまを

不ず敢あへて過よきら臨りん洮てうを

和解

北の空には星高し

哥舒は夜迄刀かたなさけ

今に戎がねらへども

河よりこちらへをこかけぬ

邊人哥舒翰の德澤を歌ひし也

答人

太上隱者

偶來松樹下

高枕石頭眠

山中無歷日

寒盡不知年

和解

松のふもとへ問に來て

高枕らする石の上へ

山の奥ゆへ曆なし

寒があげども春知らぬ

唐詩選五言絶句和歌意終

天下無比廉價少年必讀雜誌一大改良誌面一新益完益整

少文林

每月二回發行 彩色畫十入每冊五

郵送料共定價一冊金二錢六冊前金十二錢

本誌は發行以來天下無比廉價を以て異數の好評を博し
本邦雜誌中發賣數多きは比肩する者なき少年諸子の好
指南車一讀再誦皆益ならざるはなし全國雜誌店にあり

大阪電話番號壹百貳拾番

大阪市東區備後町 梅原龜七本店各地支店
四丁目卅及卅一番邸
東京發賣元京橋桶町一番地 梅原出張店
東京賣捌赤坂田町六丁目一番地 鐘鈴堂並各書林

吾人ノ權利ヲ保護スル一大意匠

農商務省

登録意匠

封筒



此文筒ヲ密開セバ剪探^{ギザ}毀損^{カケツシ}伸縮^{ノビチマミ}シテ到底原形ニ復ス
ル能ハズ實ニ此封筒出デテ憲法第廿六條ノ保護スル信
書秘密ノ權利ハ確實トナレリ價ハ在來ノヨリ却テ廉也
賣捌望^ミノ御人ハ往復はがきニテ下名專賣所へ御照
會ヲ乞

意匠者

宮澤團次郎

東京市芝區神谷町四番地

專賣所

鹿山堂

東京市赤坂區田町六丁目一番地

專賣所

鐘鈴堂

明治廿七年五月十日印刷
同年同月十八日發行

編輯兼
發行者

手柄山鐘三郎

東京市赤坂區田町六丁目一番地

印刷者

五十子善三郎

全市四谷區新堀江町一番地

發行元

鐘鈴堂

全市赤坂區田町六丁目一番地

印刷所

四谷活版所

全市四谷區新堀江町一番地

發賣所

文光堂

全市芝區櫻田本郷町九番地

版權
所有
